北水試百年こぼれ話 ⑦千鳥会旗について

吉田　英雄

キーワード：千鳥会旗、親睦会、北水試調査船

写真　千鳥会旗を囲んで（2008年４月10日、小樽港、おやしお丸出港式にて

今回は、北水試所属の調査船乗組員の親睦会であった「千鳥会」の旗についてご紹介します。

この旗は、平成19年に、北海道の漁業取締船北王丸（定けい港、稚内港）副船長であった神崎円博氏（現、漁業取締船海王丸船長）が、氏の実父である神崎友也氏（元北海道区水産研究所探海丸通信長）から、北水試の試験調査船に渡して欲しいと依頼されて、稚内水産試験場所属試験調査船北洋丸船長に手渡されたものです。

神崎友也氏は、1982年に三代目の探海丸が廃船（代船建造）される時に、荷物を整理中に旗を発見し、手元に残していたとのことでした。

旗のサイズは縦約92cm、横約121cm で、紫色の地に、親睦会の名称である「千鳥会」と「北水試調査船」の文字を配し、その周りを、四隅に錨の鎖模様で囲み、図案化された波と波間を飛ぶ千鳥を、それぞれ白く浮き立たせ、さらに北海道庁の古いマーク（★）を赤く入れてあります。布の材質は粗く、物資の無かった戦中か戦後に作られたのではないかと想像されます。

戦前の北水試は、余市に本場があり、調査船も小樽と余市が根拠地でした。戦後、北水試は、道立水試と国立水研に分離しましたが、昭和39年まで両研究機関が組織的に併置される時代が続きました。多くの船と乗組員が集まっていたことから、千鳥会は甲板部の士官達の親睦会として始まり、やがて船全体に広がっていったようです。

本紙の第58号（2002）の「うしお丸」写真発見の中で触れた、元うしお丸宮古政蔵船長のアルバムにも、「千鳥会の張り紙」が写っている写真があることから、昭和20年代は盛んに、千鳥会という親睦会が行われていたことは事実です。

現在の北海道区水産研究所と北水試の試験調査船には、千鳥会という風習は残っていません。北水試の支場が独立してそれぞれ調査船を持つなどの中で、自然に消滅していったと思われます。

戦前戦後を通じて、探海丸は、北水試のいわば「旗艦」でしたから、千鳥会旗が探海丸に保管されていたことはうなずけることです。そして、旗を作るほど絆の強い人間関係があったということでしょう。古き良き時代で済ましてしまうにはもったいないことのように思えます。

この旗は、寄贈された神崎友也氏の要望を受け、中央水産試験場図書室に保存されています。

（よしだひでお　稚内水試　場長

報文番号 B2348）